

要は無いと言つて居られるが、世間が喧ましくして迷惑を感じて居られることが私にはわかつたからモウ躊躇することは無いと思つて奥さんに相談した。奥さんも能く判つて直ぐ話を進める。當人はドウであらうかと思つて多少遠慮して居たのに、當人もモウ決意はちやんと出来て居て、直ぐ辭めようといふことになる。大臣の慈悲心に對して當人も我々も共に唯だ暗涙に咽んだことであつたし、當人の心事の恬淡高潔であつたことを茲にお話して、世の中の詰らない誤解を抹殺して置きたいと思ひます。餘の事柄は他の人々が澤山申しませうが、私は以上のお話を以つて故人を追悼し、今なほ追慕の情に堪へない次第である。(文責在記者)

追 憶

碧 水 小 島 老

副會長堀田貢氏病を三田の邸に養ふ、聞説漢藥効を奏せりと、吾人私に氏の壽を祝せり、一日會務を帯び邸を訪ふ、親しく洋館に引見せらる、時に病中の苦を察し、回春の賀を述べ、所用を了し邸を辭す。

大正十三年六月、本會、米國道路事業家ワローブラザース會社東洋派遣員一行を東京ステーションホテルに饗す、氏莞爾として來り會し、遠來の客に迎接せらる、同年八月本會第二回道路職員講習會を開始するや、氏暑を避けて湘南に在り、特に入京して講習開設の趣旨と希望とを演述し、懇切を極む、是歲十二月各理事保險協會に會す、氏又來會して意見を會務の進展に注がる、越えて十四年に至り、復

た氏の風貌に接せず、吾人其病を憂慮したり、雖然歳晚輕快を傳へ稍と愁眉を開けり。

烏鬼匆匆爰に大正十五年を迎へ、正に立春に入らんとし、突如訃報に接す。

回顧すれば大正九年始め 氏を内務省土木局に訪ひ、一見眉目清秀、軀幹長大の偉丈夫なる哉と、當時の所感今猶昨の如し、唐人歌て曰く今年花落顔色改、明年花開復誰在、と焉ぞ知らん今卒に館を捐てんとは。

氏夙に歐米を巡遊して我邦道路の劣悪なるを思ひ、之を憂ふや深し、偶米人サミュエルヒル渡來す、朝野の縉紳之を迎へ、一夕宴を設け旅情を勞ふ、ヒル我邦の道路を評する語あり、日本の道路を歩み得る人は唯バロン近藤と、ミスター淺野の兩氏而已ならんと、蓋當時東京市の道路は宛然泥海の如く、舟航以て渉るべく、此兩氏は船舶の所有者なればなり、との偶意なるべし、ヒルの評稍痛烈に過ぎたりと雖も、一面又其真相 道破せりと謂ふべし。尋て澁澤子爵本邦道路改良促進の爲、道路會の創設を提議せらるゝや、氏之に參畫して力を効し如斯して道路改良會の設立を見るに至り、蒼忙の間、常務理事に任し、大に會務の進捗に盡さる。

抑本會の設立は、其の端を東京市道路の改良に發せりと謂ふも過言に非ず、然ば事業の最先は同市路面改良の調査たりしなり、氏嚴厲克く部内を督し、從つて案を得れば從つて議を開き、毎に其議に參與して、事を進む事頗る篤敬なるものあり、遂に調査を完了して市の當局に建議し、其の實施に努力せられしこと、寔に多なりと言ふべし、晚近東京市の道路、曩日の面目を一新せんとする其因由如斯ものあり。

本會曾て此事を決し調査の業を進むるや、一面世論の喚起に屆むる所ありたく、畏くも 天皇陛下道路補助費として特に内帑の資を東京市に下し賜ふ、當時此事あるや、恰も氏自ら恩命を拜受せるが如く、歡喜勇躍の狀、今猶吾人の回顧に新なるものあり。

此秋に方り氏は益勇猛心を奮ひ大なる努力を捧げられたり、然れども、本會の事業は單に一都市の問題に限局せず、普天の下率土の濱時代の交通に適せんを期せり、而して事の次第を序し、先づ意を本邦道路の幹線、東海山陽二道の改良に注ぎ、創立第一年東海道自動車踏査の舉を企て、東京神戸間を馳驅するや、氏挺身此行を主宰し、沿道各地官民の間に應酬し、鼓舞激勵する所ありたり、近時東海各地道路の狀況着々改良の實を示せる、又以て本會に於ける氏の道路精進に負ふ所大なるものあり。

今や本會は内道路に關する各種調査を行ひ、外道路關係者の教化に力め、事業の根蒂を培養し、益會務の興隆を期せんとして、卒爾として氏を失ふ、洵に痛惜に堪へず。

以上は本會に於ける氏活躍の片鱗に過ぎず、人生夫れ夢、幻乎、往時を追懐して、情切々爲に能く所思を盡さず。

私に惟ふ氏氣宇高邁事を處するや、明察果斷眞に棟梁の材たり、永く官府に在り既に驥足を伸べんとし、病を得て致仕す、時に年齒未だ知命に達せず、尙假すに壽を以てせば、竟に國家の偉材たらん、病一旦小康を得て、復た終に立たず。

潺湲たる鶴見川の流俊才逝て復歸らず、往時を願れば、夢茫茫香煙繚々たり、總持寺の畔。